

[001_1979]第一回中央図書館貴重文物展観目録：中央図書館所蔵筑前郷土資料

九州大学附属図書館中央図書館

川添，昭二
九州大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1484999>

出版情報：大学広報. 350, pp.1-10, 1979-05-07. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報

No. 350

昭和54年5月7日発行

(編集)
九州大学広報委員会

第一回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

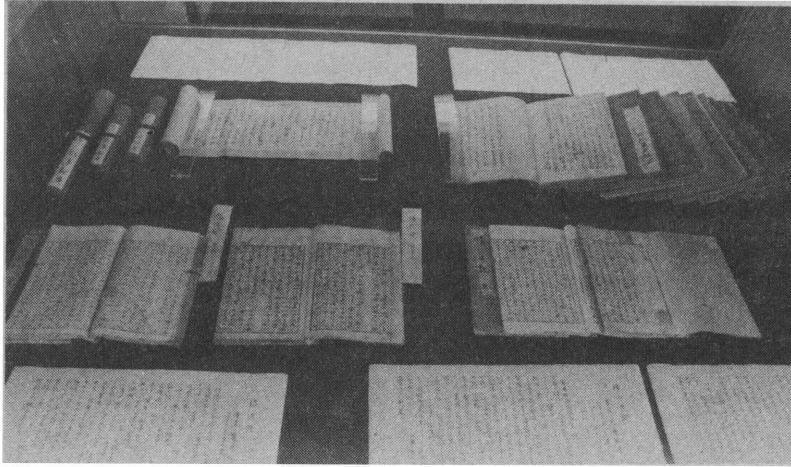
は し が き

中央図書館は、昨年(昭和53)の5月11日、開学記念行事の一環として、重要文化財の『大和物語』をはじめ本館が所蔵する貴重図書の展観を行なったところ、学内外から非常な好評をいただき、このような催しを今後さらに拡充し、恒常的なものにするよう各方面から強い要望を受けました。そこで、本館では、かかる学内外の要望にこたえて、このほど新しくメインロビーの一角に本格的な展示ケース4台を設置し、今年度から毎回特定のテーマを選んで、本館所蔵の貴重な文献や書画類を逐次展観していくことにいたしました。

その第一回として、「中央図書館所蔵筑前郷土資料」というテーマのもとに、現在下記の宝蔵文献を展示公開しております。教職員や学生諸君が多数来観されるよう希望いたします。

なお、今回このような展観が実現するに至ったのは、ひとえに文学部国史学の川添昭二教授の懇篤な御指導によるものであり、ここに衷心より厚く御礼申し上げます。

＊ 今回の展観は、中央図書館メインロビーにおいて、4月2日から6月30日まで3カ月間。



(展観貴重文献の一部)

展観貴重文献とその解説

I・貝原益軒・末永景順・亀井昭陽の著作・書簡

◎ 貝原益軒(1630-1714)

福岡が生んだ元禄前後の碩学。寛永7年(1630)福岡藩士貝原寛斎の末子として福岡城内の下級士族の官舎に生まれる。少壮のころ、たびたび江戸・京都に遊学して山崎闇斎・松永尺五・木下順庵・伊藤仁斎らの大儒に学び、その後、朱子学をもって福岡藩儒・侍講となり、藩主黒田光之の知遇を受けた。恭黙謹直、博学洽聞であって、『和漢名教』『大和本草』『黒田家譜』『筑前国続風土記』『大和俗訓』『養生訓』『慎思録』『大疑録』『近思録備考』など、儒学・教育学・史学・博物学・天文学・算学等にわたって、総計150部をこえる大小の著述がある。正徳4年(1714)没。85歳。

『貝原益軒書簡』1通 自筆

これは、貝原益軒がその高弟竹田定直(春庵)に宛てた書簡一千余通の中の一通である。
横 155.7 cm 縦 15.1 cm。

益軒の書簡は、郷土史家故伊東尾四郎氏が調査整理し、九大附属図書館(542通、109巻)と福岡県立図書館(県文化館)とが折半して分割購入している。本館所蔵の書簡は、その内容から「家譜」「風土記」「編著」「書籍」「雑」などに分類されている。本書簡全般を通じて、益軒の歴大な業績が定直の援助に負うところいかに大きかったかがうかがわれる。「書籍」の部類では、当時の出版文化、輸入書籍の販売経路などが知られる。

展示の箇所は「家譜」の部類の一部であって、黒田長政の容貌と、長政が大阪冬の陣に参加しなかった理由とを述べている。今これを読みやすく書き改めると次のごとくである。

一長政公之御容自奇代之英雄に而御座候間、御書被成可然候、黒田順世并村田無玄など物語を承候も、此御書付にちかひ不申候、此御書付は別而詳に御座候、のせもらし候ては残念存候、

一大阪陣冬は因讒人之言御疑被成候而、長政公江戸に御残被成候事、左も可有御座候、雖聖賢逢讒候は不及申候、然共若万一之御私心も有之似たる事に而讒出来候様にも疑申人有之候へは如何存候間、長政公は秀吉公へ御勤仕之御事に而、如水公已来之旧臣故御うたかひ被成たる分に而、江戸へ御残し被成たる由か可然候など存候、

二月廿日

◎末永景順(1635—1729)

寛永12年(1635) 久留米に生まれる。貝原益軒に師事し、直方藩の黒田長清に仕え、致仕後、虚舟・了仲と号した。地理学に精通し、著書に『筑前国宝鑑』20巻がある。享保14年(1729)没。95歳。

『筑前国宝鑑』残9巻9冊 末永景順著 自筆本

著者末永景順(虚舟)の自筆本残巻。本館には、古城古戦場記3巻・寺院記3巻・名所記2巻・旧跡記1巻の計9巻9冊を存する。

『宝鑑』は、元来このほかに神社記7巻、寺領録・廃寺記・郡村記・惣目録各1巻があり、計20巻20冊から成る筑前一国の分類形式の地誌である。著者の景順は、貝原益軒が『筑前国統風土記』を編纂した時の助力者であり、殊に益軒がこの書を福岡藩に献上する際には、つぶさに全巻を筆写した人物である。景順の『宝鑑』撰述の志は既に延宝年間に発しており、元禄13年(1700)には古城古戦場記に序し、名所記は宝永6年(1709)の序をもつ。本書を著わすに当たって、彼は常に古文献を渉猟し、現地を踏破して調査編述につとめている。従って、その間『統風土記』の編纂には、彼の知識をそれに加えた所もあったろうが、一方彼は、それから得る所も多く、しばしば『統風土記』ははじめ益軒の著書から引用する。宝永6年浄書後の補筆も見え、彼の畢生の著であったことがしのばれる。

◎亀井昭陽(1772—1836)

江戸後期の福岡が生んだ当時天下第一等の碩学。安永2年(1772) 亀井南冥の長子として生まれる。諱は昱、字は天鳳、昱太郎と称し、昭陽はその号。別に月窟・空石・天山遯者などとも号した。すでに十五歳で『范增韓信優劣弁』を著したほどの俊秀であって、寛政3年(1791) 徳山藩儒役藍泉に学び、帰国後、父南冥の後を襲って儒官に挙げられ家督を継いだ。寛政10年(1799)福岡藩の藩校である昭陽主宰の甘棠館が全焼して同館は廃止され、昭陽は儒官を免ぜられて西学甘棠館15年の歴史は終わった。その後、昭陽は百道に移り住み、その私塾は百道社または亀井塾と呼ばれて入門者が相次いだ。文化6年(1809)烽火番勤務。文政12年(1829)次男陽洲が家督を継ぎ、昭陽は隠居7年、講書・著述に励み、天保7年(1836)5月17日、64

歳で没した。その学識は経史百家に通じて博洽。特に古文辞を善くし、著述は頗る多い。徂徠学派の研究方法を文献学上に生かし、経史百家にわたる考証注釈は創見に富んでいる。『亀井南冥・昭陽全集』が九大関係者等の手によって編集刊行されている。

『烽山日記』3巻 亀井昭陽著 写本

亀井昭陽が福岡藩に設けられた烽火番の役目について三十歳の文化6年(1809)から翌年にかけての体験を日記体で書いたもの。

烽火番は、外国船の近海接近を警戒して、肥前・筑前・筑後・豊前等の諸藩が、各藩内の適当な山上に烽火台を設け、烽火の合図で危急を伝達した制度である。福岡藩領では6か所の山頂に烽火台が設けられ、番士が交替勤務した。

この日記には番勤めの公務とその往来、家庭と塾の状況などが細かく記されている。多様な技法で自然と人物を描写し、鋭い時局批判も見られ、社会と歴史の動きに対する観察は透徹している。近世漢文体日記の白眉である。自筆本は慶応大学に所蔵され、その写本は本館所蔵のこの本をはじめ全国に10余部が伝わっている。1紙9行20字、印刷野紙使用。上巻51丁、中巻62丁、下巻41丁。

『傷逝録』中巻 亀井昭陽著 自筆本

昭陽の末子修三郎は、昭陽50歳の文政5年(1822)7月13日、わずか6歳で急逝した。聡敏な愛児を失った昭陽の打撃は大きく、事につけ折にふれて追憶し、夢の中で相見えたことを日記に綴っている。本書はこの愛児の追悼録で、もともと3巻ならびに附録1巻より成る。誕生の記事から始まり、在りし日のことどもを深い愛情をこめ切々綿々と詳細に記している。文政5年9月から書き始め、つぎつぎに増補・刪潤を加えて翌年8月に完成している。

この自筆本は中巻に相当する部分であるが、前後にそれぞれ若干の欠失がある。随所に押紙があり、刪訂の跡が見られる。37丁、1紙9行20字平均、印刷野紙使用。なお、昭陽自筆の上巻の方は慶応大学に所蔵。下巻自筆本は亡逸したが、その正統写本は百道社から出ている。

『傷逝録』3巻・附録1巻 2冊 写本

1紙9行20字、印刷野紙使用。上巻・中巻計90丁、下巻・附録計73丁。

Ⅱ 大隈言道の著作・書簡

◎大隈言道(1798-1868)

寛政10年(1798)福岡薬院に生まれる。通称は米屋清助といい萍堂と号した。自らもいうように「市井の商人」であった。福岡藩の二川相近に和歌や書を学び、日田の広瀬淡窓に儒学詩文を学んだ。天保7年(1836)家を弟に譲り、今泉の池萍堂(さきのや)に退隠。安政4年(1857)60歳のとき大阪に上り、歌集を梓行して新歌風を世に問うた。元治元年(1864)中風を発し、慶応3年(1867)ごろ帰国。明治元年(1868)7月29日、71歳で没した。

その歌論は、当時に類を見ない大胆な現実主義・個性主義に徹し、歌風は平淡輕妙、題材・形式・発想ともに新鮮であった。存命中はあまり世に知られなかったが、明治30年代に入って佐々木信綱氏が紹介して以来、高く評価されるようになった。その、福岡の庶民生活に根ざした歌論と歌風は、近世和歌史に異彩を放つものである。

一博多福岡にすみながら、其地をよめる歌当世すくなきは何ぞ一(『ひとりごち』)

『大隈言道家集』上下2冊 自筆本

明治38年(1905)大口鯉二氏が新潟県の萩原此吉氏から借覧し、後に譲り受けていたもので、その後弘文荘を経て本館の所蔵となった。上冊の末尾に安政6年(1859)5月14日の言道の朱書識語があり、下冊の末尾に同年5月21日の言道の朱書識語がある。この識語によれば、4か年に4万首の歌を詠んだというから、その多作ぶりが知られる。展示の箇所中に次の歌が見え、博多・福岡の二子都市の状況がよく詠まれている。

福岡
(博多) (橋) (渡) (福岡) (里)
並松のはかたを過てはし二わたればやがてふくおかのと

『太宰府賦 序』卷子1巻 大隈言道著 自筆本

安政5年(1858)2月、大阪中之島滞在中の大隈言道の筆になる。内容は、安楽寺=天満宮・観世音寺・学業院等、太宰府の歴史と当時の状況を述べたもの。横26.8cm 縦26.6cm。

『萍堂先生 大隈家系譜略記』1冊 大隈言道著 自筆本

豊後玖珠郡の旧家から出ている大隈氏の略系を述べたもの。その中で「宰府蓮葉水寄

進」を一行立てにしているのは、亡父の事蹟を述べたものである。手鑑形式で5紙。1紙の横32.4cm、縦24.1cm。最奥の左下に「梅野蔵書」の朱印があり、大隈言道研究家として有名な梅野満雄氏の旧蔵本であったことが知られる。

『大隈言道書簡』1通 自筆

本書簡は、大阪から飯塚の門人小林重治に宛てたもので、言道の大阪時代の生活ぶりを彷彿とさせる。小林重治は飯塚で代々酒造業を営み家は富んでいたもので、言道が『草徑集』を上梓するとき陰に陽に費用を援助している。言道は飯塚滞在中の嘉永4年(1851)夏、自撰の『春野集』(本館蔵)を贈っている。横121.8cm 縦15.7cm。継紙3紙。今これを読みやすく書き改めると次のごとくである。

芳書難有披見仕候、愈御平康被為渡奉欣候、抑も私事無異今程稱檀木橋第二楼中島之すさき鳧居室と号し申候、勿論筑藩大隈言道の門札うち大分知人多く相成却て殺風景所に付、唯閑静を宗として独居毎日鍋一のかしぎ主従一人来客は彼方よりもちだしならでは引受不申候、無資主之くらし良米は脇より到来いたしとかく他行御致方も利口^やなら付申候、福岡よりも巻まわり申候、ここもと弟子新社中に見せ申候処、爰は愚之愚、黄面先生のみたのみ居候人達故、其方は黄金の山、わたくし住居の向はかしまや一統日本第一金のかたまりに御座候、一もうらやましからず候、来陽は直道も上坂のつもり^(古II)に候よし、何卒御上坂被成候べく候、わたくし住居直道の新宅の風景に大に似より彼三大橋は^(古II)るかに毎朝霧よりあらはれ候などは金城目前、生駒山遙々に雪中月夜誠に^(後筆)おもしろかし^(直好)く奉存候、色々風流家多くされどうたよみは熊谷、萩原遠行いたし候に付、外には名家^(調)もなく当時欄落仕居申候、出帆いたし候とて船人いそかし候間御頼の短冊も此節迄は下し得不申候、尤爰は福博よりも代金高京師下々の斗に御座候、京師に申遣候積に付、手に入候はと早速差出し可申候、何も取急勿々申上候、頓首

十一月廿九日

言道

小林重治殿

尚々御老人方に序御鳴謝奉頼候、御連中にも書状此節迄に指出得不申候、重道・直雄ぬし当り候、重疊、

Ⅲ 江藤正澄の編著

◎江藤正澄(1836-1911)

天保7年(1836)10月12日、筑前国夜須郡秋月鷹匠町に秋月藩士上野忠右衛門の二男として生まれ、文久3年(1863)28歳のとき同藩の医師江藤良愼の養子として家督を相続した。明治政府となり、太宰府神社大宮司その他諸神社の宮司を歴任。明治10年(1877)実父の病いによって帰国。父の死後は官途につかず、福岡市簀子町に居を構えて古本屋を営み古物商を兼ねた。書籍・考古資料等の収集は歴大であり、考古学・有識故実に造詣深く、観古堂・随神屋と号していた。明治44年(1911)11月22日、76歳をもって病没。

本館収蔵の自筆稿本類は、昭和16年(1941)三男広三郎氏によって寄贈されたものである。

『江藤家蔵物品目録』1冊 江藤正澄編 自筆本

本目録は、江藤正澄が30余年間その見聞に従って収集した歴大な考古・美術・宗教等の資料の中から古雅なる珍品を選び、12門に分類して図解したもの。明治21年(1888)7月に整理し、同23年7月に補訂を加えている。横12.5cm 縦18.2cm。

展示箇所の図は、江藤正澄が伊勢の徴古館に寄贈して、現在重要文化財に指定されている据台付子持聴の図である。

『随神屋集古図説』2編1冊 江藤正澄編 自筆本

江藤正澄収集の考古・美術・宗教等の資料を図解したもの。第1編末尾に「壬辰(明治25年)八月十五日観古堂主人識」とある。現在散逸している多くの資料を伝えていて貴重。

『筑紫雑纂』9冊 江藤正澄編 自筆本

筑前を中心に考古・美術等の資料や古文書・典籍等の資料を収集編纂したもので、筑前のみならず東京・京都その他の地にも及んでいる。筑前関係諸資料で今は散逸したものが多く収録されており、関係諸学の資料として貴重である。綴込みは明治5年(1872)から同44年(1911)に及んでいる。

『福陵雑纂』6冊 江藤正澄編 自筆本

考古・美術・宗教等の各種資料を、明治15年(1882)から同39年(1906)にかけ

て綴り合わせたもの。収集は東京・京都・大阪の三都をはじめ日本各地にわたっており、江藤の超人的な収集ぶりがうかがわれると共に、今は散逸した古文書その他多くの資料が知られる貴重な文献である。

かぜのつて
『嘉瀬乃津伝』4冊 江藤正澄編 自筆本

12冊本を3冊ずつ合わせて4冊に整理している。第1冊から第3冊までは、幕末の対外関係と、それを背景とする国内の錯雑した政治的動向を具体的に知ることのできる重要な史料を収めていて、はなはだ貴重である。第4冊は、明治元年(1868)から明治10年(1877)までを主な内容とし、一部は同16、7年に及ぶ維新期の政治的動向を示す重要史料をも収めている。

本書について、編者の正澄は自ら「後来当時ノ情態ヲ知ラント欲セバ、必ズ此書類ヲ看バ、良^{やや}了解セムカ」と言っている。編者自身、幕末維新期の国事に奔走しているから、同時期の筑前における政治的動向を研究するには必見の史料である。

IV 江島茂逸の著作

◎江島茂逸(1842-1912)

天保13年(1842)12月、筑前国早良郡西新町に生まれた。福岡藩の卒属。王陽明の学を学ぶ。郡吏となって学務を督し、さらに国立銀行・商業会議所の創立に参画し、博多港の復興、日清貿易の興隆をはかった。青邱庵如煙宗予居士と号し、青邱漁夫と称する。後、専ら史乘の編述に志し、その編著は数十余種に上る。黒田家に聘せられて修史の業に従い、福岡藩殉難志士の事蹟を明らかにし、幕末維新史の参考となるものが多い。明治45年(1912)7月15日没。71歳。

『岩屋城軍史』稿本1冊 江島茂逸著

外題は「巖屋軍史」とし、内題は「高橋紹運岩屋城軍史」とする。高橋紹運の抛る岩屋城(四王寺山の南端)への島津氏の攻撃戦を中心に、その落城、豊臣秀吉による九州一統などを記した軍史。113丁。

高橋紹運(鎮種)(1548-1586)は、大友宗麟の老臣吉弘鑑理の次男。永禄12年(1569)筑前宝満・岩屋の二城を与えられたが、天正14年(1586)7月、島津義久によって岩屋城を攻められ、27日自殺落城。

『中村円太無二伝』稿本 1 冊 江島茂逸著

幕末、尊皇攘夷運動に多彩な活動をし、慶応元年(1865)31歳で自刃して果てた福岡藩士中村円太の伝記稿本。126丁。無二は円太の諱。

『高杉晋作入筑始末』稿本 1 冊 江島茂逸著

元治元年(1864)8月、幕府による長洲征伐を機として、守戦派の高杉晋作は中村円太らの援助により山口を脱出、筑前に潜入した。その際、野村望東尼が高杉を平尾山荘にかくまったことは世に有名である。本稿は、高杉入筑の経緯を叙したもので、明治26年(1893)11月、東京の団々社書店から刊行している。

『~~明治~~ 筑前一揆竹槍実記』1冊 江島茂逸著 自筆初稿本

明治6年(1873)の筑前竹槍一揆の顛末を、殉難者の義烈を顕彰する立場から記述したもの。緒言の末尾に、「明治二十六年三月 青邱魚夫 江島茂逸撰」とある。筑前竹槍一揆に関する自筆の初稿本。138丁。内容は全般に簡略で加削が多い。江島茂逸は、その後少なくとも3度は本稿に修正加筆を施して大幅な補訂をしている。ちなみに福岡県文化会館の黒田家文書に含まれる『~~明治~~ 筑前一揆党民竹槍史談』は、その補訂稿である。